

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和3年度（2021年度）発生予報第3号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和3年度（2021年度）病害虫発生予報第3号（6月予報）

I 気象予報：令和3年（2021年）5月20日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	30	30	40
	降水量	10	40	50
	日照時間	50	40	10

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早期・ 早植水稻	葉いもち	やや多	やや多	並(±)	少(-)	降水多(+)	
イグサ	イグサシンムシ ガ	やや少	やや少	—	並～少 (-)	気温高(+)	予察灯調査 八代市 並(±)
茶	炭疽病	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温高(+) 降水多(+)	
	カンザワハダニ	多	多	多(+)	やや多(+)	気温高(+) 降水多(-)	ほ場調査 御船町 平年比 やや多(+)
	チャノココクモ ンハマキ	並	やや多	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水多(-)	フェロモントラップ 合志市 並 (±) 御船町 やや少(-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
カンキツ	黒点病	やや多	やや多	—	並～少(—)	降水多(+)	
	そうか病	並	並	並(±)	並～少(—)	降水多(+)	ほ場調査 宇城市 やや少(—)
	かいよう病	やや多	やや多	並(±)	やや多～少 (±)	降水多(+)	ほ場調査 宇城市 多(+)
	ミカンハダニ	多	多	多(+)	やや多(+)	気温高(+) 降水多(—)	ほ場調査 宇城市 やや少(—)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	—	並～少(±)	気温高(+) 降水多(—)	粘着トラップ調査 熊本市 並 (±)
ナシ	黒星病	並	やや少	並(±)	やや多～少 (±)	降水多(+)	
果樹 全般	果樹カメムシ類	少	少	—	並～少 (±)	気温高(+) 降水多(—)	予察灯・フェロモン トラップ調査 合志市 やや少(—) 宇城市 少(—) 天草市 少(—)
イチゴ 育苗ほ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	
	うどんこ病	やや多	やや多	やや少(—)	やや多(+)	気温高(+) 降水多(+)	
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温高(+)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
果菜類	タバコ コナジラミ	並	並	キュウリ 少(-)	ナス やや 多~並 キュウリ 並 スイカ 並 (±)	気温高(+) 降水多(-)	
	アザミウマ類	並	やや多	キュウリ 多(+)	ナス やや 多~やや少 キュウリ 並 スイカ や やや多~並 (±)	気温高(+) 降水多(-)	
野菜類 全般	オオタバコガ	やや多	やや多	—	ナス 並 キャベツ 並~少 (±)	気温高(+) 降水多(-)	フェロモントラップ [®] 調査 合志市 多 八代市 多 阿蘇市一の 宮 多 山都町 少 (+)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

2 予想発生量、根拠、対策等

◎早期・早植水稻

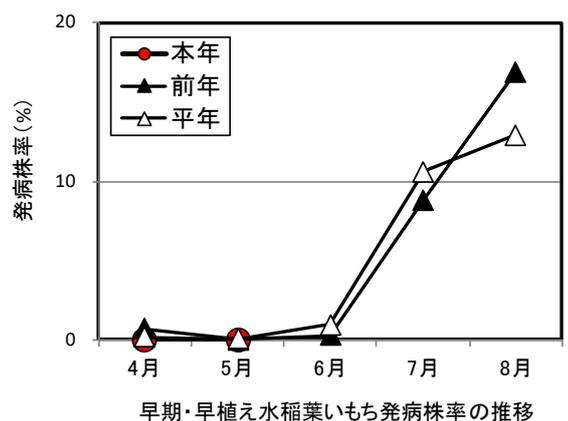
1) 葉いもち

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発生は認められず（発病株率平年0.1%）、平年並であった（±）。

(3) 対策 ア いもち病感染好適条件（BLASTAM）の判定結果を参考に、ほ場での発生状況を観察し、発生初期に防除を行う（最新の情報は熊本県病害虫防除所のホームページを参照する）。

イ 箱施薬を行っていないほ場では、特に早期発見に努め、初期防除を徹底する。



◎イグサ

1) イグサシンムシガ

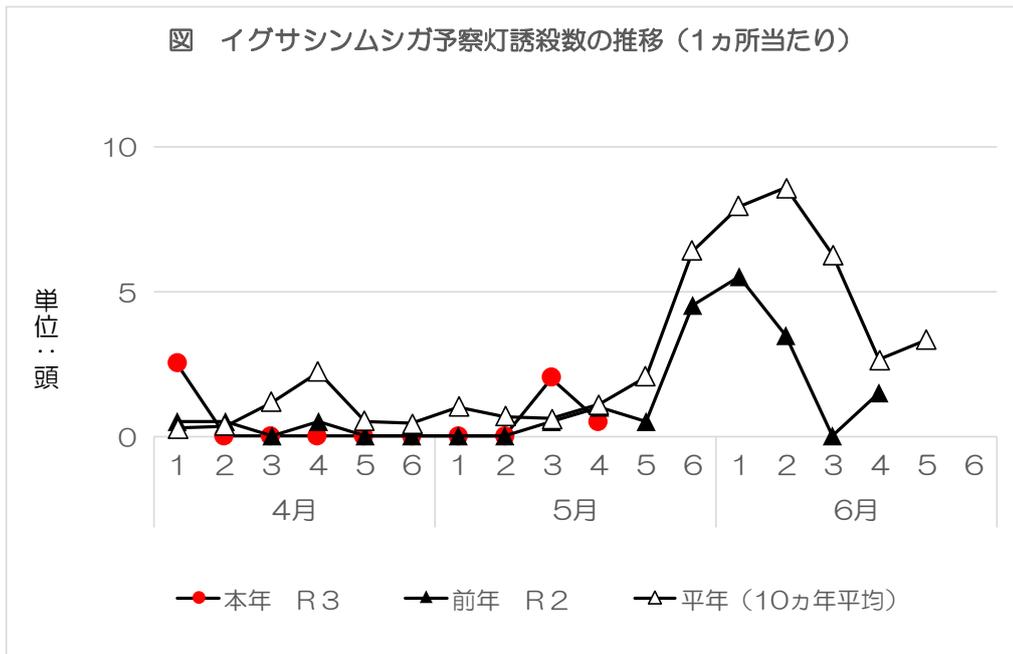
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 予察灯調査（八代市2か所）では、5月第1～4半旬の1か所当たりの誘殺数は2.5頭（平年3.4頭）で平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 予察灯調査から得られた基準日をもとに、有効積算温度で予測した第一世代の発蛾最盛期は5月30日である。なお、最新の情報は病害虫防除所のホームページを参照する。

イ ほ場での発生状況に注意しながら、発蛾最盛期およびその後1～2週間の範囲で2回程度の広域防除を行い、第二世代幼虫による被害を防ぐ。

ウ 産卵およびふ化幼虫の食入を防止するため、第二世代幼虫期に5cm以上の深水管理を行う。



◎チャ

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多

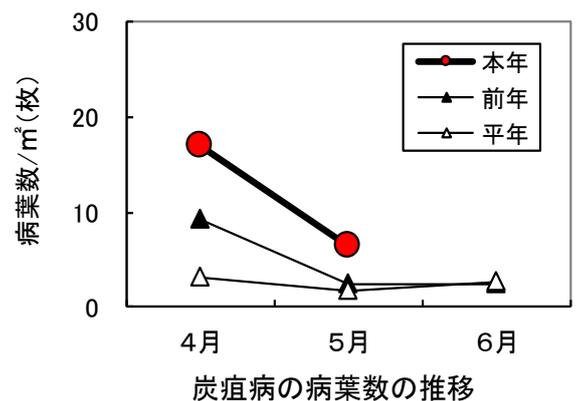
(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発病葉は6.5葉/m²（平年1.8葉/m²）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 向こう1か月の予報では平年に比べて気温が高く、降水量が多い（+）。

(3) 対策 ア 感染は、開葉直後の新葉に限られるため、萌芽～開葉期に薬剤散布する。

イ 二、三番茶を摘採しない園は、深刈り、浅刈り等を行い伝染源となる罹病葉の除去に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) カンザワハダニ

(1) 発生量：多

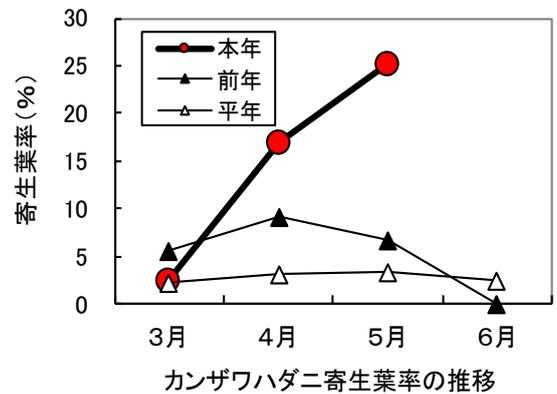
(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、寄生葉率25.3% (平年3.4%)と平年比多の発生であった(+)。

イ 茶業研究所(御船町)の5月第1～4半旬の調査では、寄生葉率4.3% (平年2.0%)と平年比やや多の発生であった(+)。

(3) 対策 ア 発生密度が高い場合は、収穫前使用日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ 摘採直前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



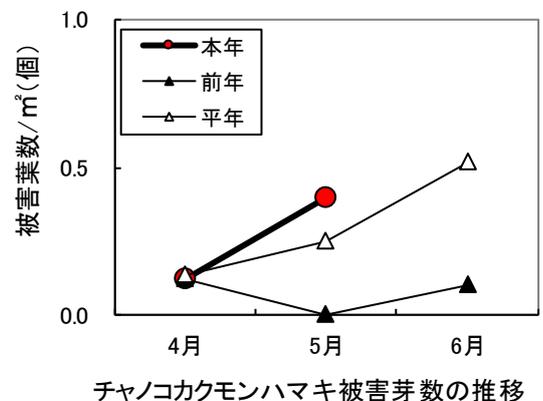
3) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、被害葉数0.38葉/m² (平年0.25葉/m²)と平年並の発生であった(±)。

イ 生産環境研究所(合志市)の粘着トラップ調査では、5月第1～4半旬の捕獲頭数が21頭 (平年27頭)と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 次世代の発生ピークは例年(6月中旬)より早まることが予想されるので、ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。通常、各茶期の摘採直後が防除適期にあたる。



◎カンキツ

1) 黒点病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 果樹研究所(宇城市)の予察ほ場において、初発日は5月25日(平年6月5日)と平年に比べて早かった。

イ 梅雨入りが早く、向こう1か月の予報では平年に比べ降水量が多い(+)。

(3) 対策 ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝は剪除する。また、剪除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。

イ 果実被害を防ぐため、主な感染時期である梅雨期直前から防除を始める。

ウ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。



2) そうか病

(1) 発生量：並

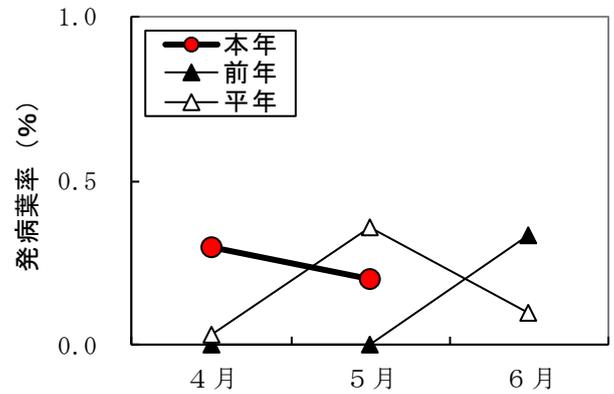
(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では発病葉率は0.2% (平年0.4%) と平年並の発生であった(±)。

イ 果樹研究所の無防除区では、5月第3半旬に発病葉率18.5% (平年28.2%) と平年比やや少の発生であった(-)。

(3) 対策 ア 伝染源の量とその後の発生に大きく影響するので、病葉はできるだけ剪除し、併せて園内の通風・採光を図り、雨、露などが早く乾くようにする。

イ 落花期から梅雨末期までの防除が有効であるため、時期を逃さないようにする。なお、果実での潜伏期間は好適条件下で10~15日である。

ウ 摘果時は、被害果の除去に努める。



そうか病発病葉率の推移

3) かいよう病

(1) 発生量：やや多

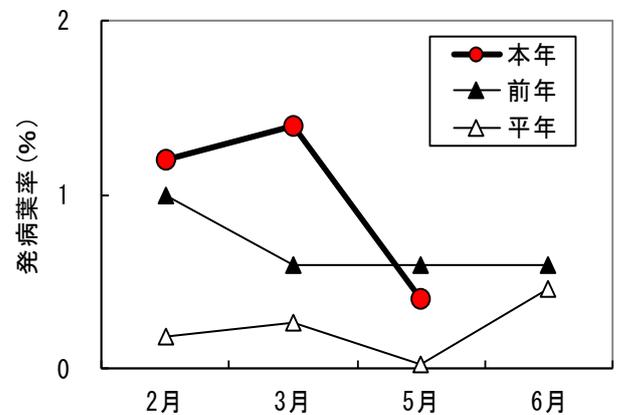
(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発病葉率0.4% (平年0.1%) で、平年並の発生であった(±)。

イ 果樹研究所の予察ほ場では、5月第3半旬の発病葉率は21.4% (平年1.8%) で、平年比多の発生であった(+)

(3) 対策 ア 本年は春葉での発生が平年より多い傾向であるため、伝染源となる発病葉や枝などの剪除や薬剤防除を徹底し、春葉から幼果への感染拡大を防止する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除及び剪除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



かいよう病発病葉率の推移



3) ミカンハダニ

(1) 発生量：多

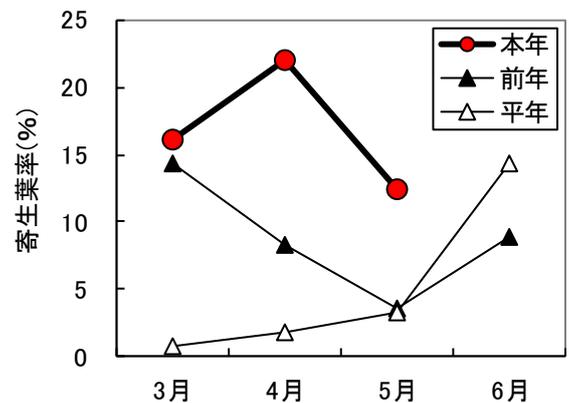
(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率 12.4% (平年3.4%)、寄生頭数 3.8頭/10葉 (平年0.6頭/10葉)と平年比多の発生であった(+).

イ 果樹研究所の予察ほ場では、5月第4半旬に雌成虫の寄生葉率1.0% (平年 8.9%)、寄生頭数0.1頭/10葉 (平年 1.2頭/10葉)と平年比やや少の発生であった(-).

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30~40%または、10葉当たり寄生頭数が5~10頭に達したら防除を行う。

イ 必要に応じてマシン油乳剤を散布し、夏ダニの発生を予防する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ミカンハダニの寄生率の推移

4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 熊本市河内町の粘着トラップ調査における5月第2半旬の捕獲数は0.3頭/日 (平年0.2頭/日)と平年並の発生であった(±).

(3) 対策 ア 第二世代幼虫から果実への加害が始まる。有効積算温度シミュレーションの計算結果で得られた羽化最盛期を参考には場を観察、発生量を把握し、防除を実施する。なお、第二世代及び第三の羽化最盛期は下表のとおりに予想された。

イ 発生調査は、果実(100果)を5,000~10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。

表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (5月25日現在)

地点名	第2世代	第3世代
熊本	5月24日	6月17日
三角	5月30日	6月22日
本渡	6月4日	6月27日
八代	5月27日	6月21日
水俣	5月28日	6月22日

※予測された羽化最盛期は今後の気温により変動する。最新の予測結果は、病害虫防除所のホームページを参照する。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

◎ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発病葉率1.0%（平年0.8%）と平年並の発生であった。

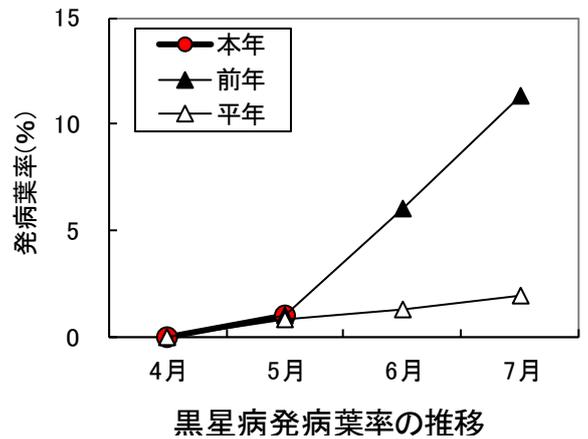
(3) 対策 ア り病葉及び果実は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 「幸水」の果実は、開花60～85日後（6月上旬～7月上旬）に黒星病に対する感受性が再度高くなるため注意する。

ウ 保護殺菌剤による予防散布を心掛る。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、Q o I系、DMI系及びSDHI系の薬剤は年間使用回数をそれぞれの系統で2回までとする。

オ 降雨が多いと発生が多くなるため、梅雨期の防除を徹底する。



◎果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 5月第1～3半旬の予察灯及びフェロモントラップによる誘殺数は、チャバネアオカメムシが合志市、宇城市、天草市で平年比少（－）、ツヤアオカメムシが合志市で平年比やや少（－）、宇城市、天草市で平年比少（－）であった。

表1 各地域のカメムシ類の誘殺状況（5月1半旬～5月3半旬）

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平年値	平年比 (%)	本年	平年値	平年比 (%)	本年	平年値	平年比 (%)	本年	平年値	平年比 (%)
合志市	8	53	15	11	35	31	10	23	43	0	0	-
宇城市 (松橋町)	24	149	16	13	133	10	38	280	14	18	104	17
天草市 (本渡町)	62	1,151	5	29	454	6	11	614	2	2	87	2

単位：頭、平年比 (%)：(本年誘殺数/平年値)×100

(3) 対策 ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを病虫害防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載しているので、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や防除適期の参考にする。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

◎イチゴ（育苗ほ）

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

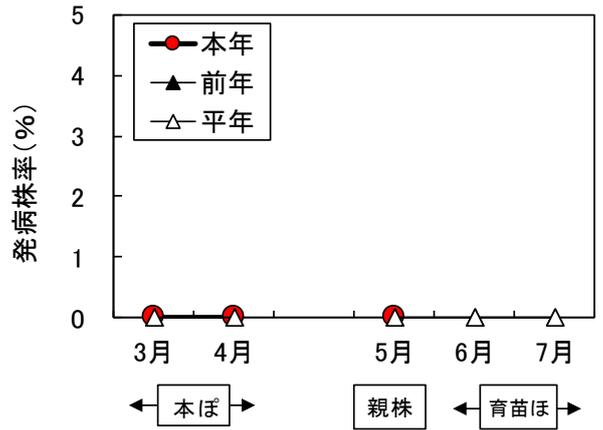
(3) 対策 ア 親株床、育苗床はビニールで雨よけをする（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗床での病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にはほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。



炭疽病の発病株率の推移
(イチゴ)

2) うどんこ病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年6.6%）で平年比やや少の発生であった（-）。

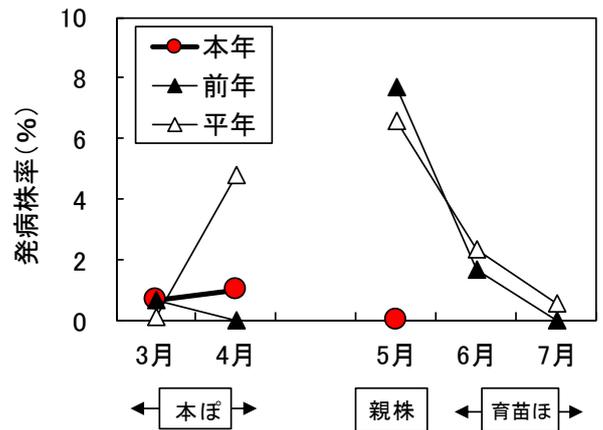
イ 5月の防除員では、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 発生していないほ場でも定期的に防除を行い、発生前から予防防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病(葉)の発病株率の推移
(イチゴ)



3) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、親株の寄生葉率19.0%（平年11.5%）で平年比やや多の発生であった（+）。

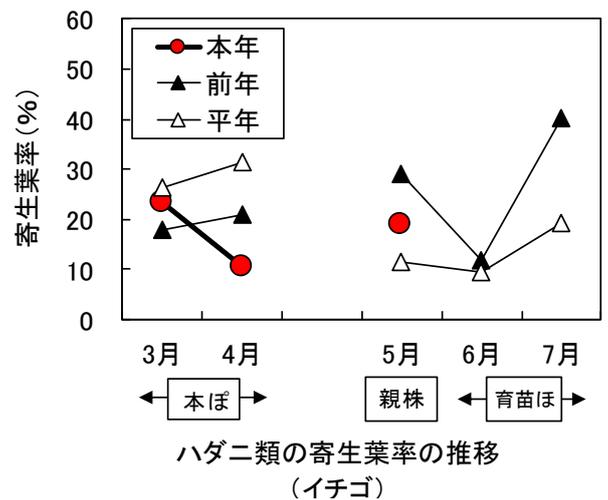
(3) 対策 ア 寄生葉を早めに取り除きほ場外で処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ぼまでの栽培期間を通した防除計画を立て、気門封鎖剤等も利用しながら、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ その他詳細は、3 防除のポイント等の「イチゴ育苗床での病害虫の発生を防止しましょう」を参照する。



◎果菜類

1) タバココナジラミ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 5月のキュウリの巡回調査では、寄生葉率1.5%（平年4.8%）で平年比少であった（-）。

(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ ウイルス病発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分する。

ウ 施設内部の雑草は、生息場所となるので除去する。

エ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 5月のキュウリの巡回調査では、寄生葉率3.5%（平年1.3%）で平年比多であった（+）。

(3) 対策 ア ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎野菜類全般

1) オオタバコガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア フェロモントラップによる5月第1～4半旬の誘殺数は、合志市・八代市・阿蘇市一の宮で平年比多、山都町で平年比少であった(+)。

(3) 対策 ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

ウンカ類の飛来情報の収集に努めましょう

昨年は「坪枯れ」等の被害を引き起こすトビイロウンカの飛来が過去10年中最も早く、5月3日に初飛来を確認されました。本年はまだ確認されていませんが九州の他県では確認されており、今後も梅雨時期を中心に海外から断続的に飛来すると予想されますので、飛来情報やほ場内の密度を定期的に把握し、適期防除を行いましょ。

- (1) ウンカ類の飛来情報を病虫害防除所ホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/дата.html>) 等で確認し、適期防除に努める。
- (2) トビイロウンカに対してはイミダクロプリド(商品名:アドマイヤー)等の薬剤で感受性が低い状態がつづいている(病虫害防除所ホームページ感受性検定結果を参照(http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/H31/yosatu/200304gi_jyutu.pdf))。感受性低下した箱施薬剤を使用しているほ場や箱施薬剤を使用していないほ場では、ほ場を確認しトビイロウンカの発生に注意する。

いもち病の発生に注意しましょう

今年は梅雨入りが平年より早く、気象庁によると今後1ヶ月は降水量の多い予報であることから、いもち病感染の好適条件となる日も多くなると予想されます。つきましては以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 葉いもちは、育苗箱施用剤と発生初期の薬剤散布で防除する。
- (2) イネを健全に育てることに留意し、種子の厚まきや苗の密植をしない。
- (3) 肥料の多施用は、発病を促進する。特に、天候不良時の穂肥の多施用を避け、時期遅れとならないようにする。また、有機質肥料の過度の施用を避ける。
- (4) 余り苗及び補植用苗は、伝染源となりやすいので、不要となった苗はただちに処分する。
- (5) ケイ酸資材の施用により、稲体を強化する。

スクミリンゴガイの発生に注意しましょう

移植後はほ場をよく観察して、以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 水路から水田への侵入を防ぐため、取水口および排水口は金網(4mm以下)で覆う。さらに、排水口は、常に排水路の水面より高くなる場所に配置する。
- (2) 深水管理すると被害が大きくなるので、発生が多い水田では水深1cm以下の浅水管理を行う。
- (3) 移植後に水田内の貝が多いときは捕獲する。特に、浸冠水後は貝が侵入しているので、見回り捕獲する。
- (4) 薬剤防除を行う。薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤(メタアルデヒド等)と行動抑制する剤(カルタップ等)があり、これらは併用しない。

麦類の赤かび病に注意しましょう

収穫前で赤かびが多発しているほ場がある場合は下記の対策を徹底する。

- (1) 収穫時にはほ場を確認し、赤かび病発生の多いほ場や発生ほ場で倒伏がみられた場合は、かび毒汚染の可能性が高くなるため、可能な限り、他の麦とは分けて収穫する。
- (2) 共同乾燥施設においては、荷受時に赤かび病被害粒のチェックを行い、赤かび病被害粒がみられた場合は、必要に応じてその他の麦とは別に乾燥するなどの仕分けを行う。



イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1 ハダニ類

ほ場をよく観察するとともに、以下の防除対策を徹底し、育苗ほでの発生を防止しましょう。

<防除対策>

- (1) ほ場周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
- (2) 除去した下葉や株は、ほ場周辺に放置せず適切に処分する。
- (3) 育苗ほでハダニ類の発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、卵に効果が低く、残効も短いので、約7日間隔で複数回散布する。

2 炭疽病

保菌親株から苗への炭疽病菌の伝染及び苗での炭疽病菌のまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 親株ほ、育苗ほは必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 親株ほ、育苗ほにはこれまで本病が発生していないほ場を選び、冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水にする。
- (4) ランナー発生前から予防的に薬剤防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3 うどんこ病

梅雨時期は発病に好適となり、この時期に発生が多くなると秋期の発生が多くなります。本ほ定植後の発生を抑制するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 発病葉および不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (2) 早期発見のため、発生しやすい葉裏まで丁寧に観察する。
- (3) 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- (5) 気温が高い夏期は病勢が抑制されるが、定期的に予防防除を行い、新葉への感染を防ぐ。



施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう

1 野菜のウイルス病まん延防止について

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

そこで、ウイルスを保毒した微小害虫のまん延を防止するため、栽培終了後に密閉処理を行い、まずは植物体を完全に枯らしましょう。さらに、地域で取り決めた期間にわたり処理を継続することで、確実に微小害虫を施設内で死滅させましょう。

◎密閉処理による微小害虫防除のポイント

- (1) 微小害虫（成虫）は、絶食状態では1日以内に死亡する。そこで、施設内の微小害虫を死滅させるため、施設内の雑草を除去し、作物を枯死させることで、植物を摂食できない状況を作る。
- (2) 施設内の微小害虫が施設外へ飛び出さないよう、施設は被覆ビニル等でしっかりと密閉する。
- (3) 密閉する日数は、害虫の習性や寄生部位等を考慮して決める。
 - ・コナジラミ類の終齢幼虫は、株が完全に枯死しないと生存、羽化する場合がある。
 - ・ミナミキイロアザミウマの蛹は、土の中において植物を摂食しないため、株の枯死と関係なく生存する。蛹期間が、20℃で約7日であるため、密閉処理は、植物体が完全に枯れてから10日以上続ける必要がある。
- (4) 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤^{注1}の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- (5) 密閉処理の途中で施設を開放すると、微小害虫が野外へ逃げ出すため、施設内の片付けは、密閉処理期間を過ぎた後に行う。

注1) 令和3年5月20日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

- ・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）
- ・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）

※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ

◎野良生えトマトの除去を徹底しましょう

密閉処理を行っても、ハウス周辺に野良生えトマトがあると保毒虫が残る可能性がある。そのため、ハウス周辺の廃棄トマトは早めに土中に埋めるなど適切に処分する。

2 土壌病害の対策について

土壌病害対策は、栽培開始後には有効なものが限られることから、防除対策は栽培開始前に徹底して実施しましょう。

- (1) 作物残さは施設外に持ち出し適切に処分する。残さ処理の終わったほ場は、太陽熱土壌消毒などによりほ場の隅々まで土壌消毒を行う。また、時期や天候不順によって防除効果が不十分な場合には、薬剤による土壌消毒を実施する。
- (2) 土壌病害が発生したほ場で、くん蒸剤などの土壌消毒剤を使用する際は、作物残さの分解が十分に進んだ状態で処理することで高い防除効果が得られる。
- (3) 施設内で使用した資材・農機具についても消毒を行い、病原菌や線虫など土壌病害虫の密度を徹底して減らすことが重要である。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
早期・ 早植水稻	イネミズヅウ ムシ	並	巡回調査は、平年並(±)。 間断かん水を行い、根の健全な生育を図る。
茶	チャノキイロ アザミウマ	並	巡回調査は、平年並(±)。 粘着トラップ調査 合志市：平年並(±) 新芽が加害されるため、萌芽～1葉期に防除する。
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	並	巡回調査は、平年比やや少(－)。 新芽が加害されるため、萌芽～1葉期に防除する。
	ツマグロアオ カスミカメ	やや少	巡回調査は、平年比少(－)。 防除員報告では、平年比やや多～並(+)。 常多発茶園では、萌芽期を重点に防除する。
	クワシロ カイガラムシ	並	巡回調査は、平年並(±)。 ふ化状況をよく観察し、ふ化最盛期(卵塊全体の60～80% になった時期)に防除する。
カキ	炭疽病	並	防除員報告は平年並(±)。 降水量は平年比多(+)。 梅雨期は発生が多く、蔓延しやすい時期であり、予防防除 に努める。
ブドウ	べと病	並	防除員報告では平年並(±)。 降水量は平年比多(+)。 梅雨期は発病の好適条件であるため、昨年発生が多かった 園では保護殺菌剤を定期的に散布し、初期感染を防ぐ。
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	防除員報告は平年並(±)。 適正な肥培管理を行う。
	うどんこ病	並	防除員報告は平年並(±)。 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
野菜類 全般	ハスモン ヨトウ	並	フェロモントラップの5月第1～4半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮及び阿蘇市波野で平年比多、合志市及び八代市で平年並、山都町で平年比少(±)。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では、防虫ネットで侵入を防ぐ。
	アブラムシ類	並	巡回調査は、キュウリ・イチゴで平年並(±)。 防除員報告は、ナスで平年比やや多、キュウリ・バレイシヨで平年並、スイカ・イチゴで平年比やや多～並、キャベツで平年並～やや少(±)。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では、防虫ネットで侵入を防ぐ。
<p>【野菜病虫害の共通対策事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jpjn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jpjn.ne.jp/kumamoto/>」